

切り取られた 空を見上げて



芳田尚哉



「……………んあ？」

ナ・ムーウエンは、小さくあくびをして、ごしごしと目を擦った。

いつの間に眠ったんだろう？ と思いながら、ゆっくりと目を開ける。

「ん？ あれ？」

てっきり、いつもの自分の部屋の、いつもの見慣れた天井だと思ったが、目の前の景色は、記憶にあるものではなかった。

「あれ？」

そこには、空が広がっていた。

大風で、家の屋根がなくなっちゃったのかな？ でも、そんなはずないよね。

そう思ってからようやく、自分が眠っていたのが、いつものベッドではない事に気付いた。

手には、ざらざらとした砂の感触がある。

ナ・ムーウエンは、ゆっくりと体を起こした。

「あれ？ ここは……どこ？」

目の前には、ごつごつとした岩があった。まさか、家がこんな事に……なんてはずはない。

きょろきょろと見回してみても、見えるのは同じ景色だけだった。

上だけが、空が見える。

「もしかして、夢でも見てるのかな？」

ナ・ムーウエンは、首を傾げながら自分の頬をつねる。

「いたたっ。痛いよ」

自分でつねった頬は痛かった。

「夢じゃ……ないんだよね」

痛む自分の頬をさすりながら言う。

こんなに痛いのに夢のはずがない。

じゃあ、これは……どういう事だろう？

「ボクは、どうしてこんな所に？」

もう一度、自分がいる場所をきょろきょろと見回す。

「あっ……」

もう一度見回してみると、さっきは気付かなかったものを見つける事ができた。

どうして最初に気付かなかったのかわからないけど、そこには自分と同年の女の子がいた。

「……イリス？」

そこには、ナ・ムーウエンもよく知っている女の子が横たわっている。……………眠っているようだ。

彼女は、遙か昔に『魔王』によって邪悪な蛇の妖怪に滅ぼされたと伝えられていた『デル族』の末裔の少女——イリス・イヴィエール。

長い髪と大きな瞳が印象的な女の子だ。

もともと、その大きな瞳は、今は閉じられている。

すうすうと、可愛い寝息が聞こえるので、ただ眠っているだけだろう。でも、どうしてこんな所で眠っているかは謎だ。

「……ボクも、眠ってたんだっけ」

自分も、ついさっき起きたばかりだと思い出す。

「どうして、ここにいるんだろう？」

腕を組んで、なんとか思い出そうとするが……。

「……思い出せないや」

全く思い出せず、これ以上考えても無理そうなので諦める。

「それよりも、なんとかして、ここから出ないと……だよな」

上を見上げる。

周囲は全部、岩や土で囲まれていて、上だけが開いている。

「……………穴？」

自然にできた穴なのか、誰かが仕掛けた落とし穴なのか、それはわからないが、周囲を見る限りは、どうやら自分たちは、穴に落ちたらしい。

それが、ナ・ムーウェンが出した結論だった。

「どうにかして出たいんだけどな……」

ずっと、この穴の中にいるわけにはいかない。なんとか出ないと。

そう考えて、壁をよじ登ろうとするが、手を掛けるほどの岩もなく、ただの土はさらさらと滑ってしまって、登れそうになかった。

登ろうとして、足場でも作ろうものなら、土が崩れてきて、自分たちが埋まってしまいそうな気がする。

かといって、ジャンプしても届くような高さでもない。

「どうしよう……」

ぺたりと地面に座り込む。

「すうすう……」

どうしようかと考えていると、横から幸せそうな寝息が聞こえてくる。

「イリス……」

寝顔を見ると、本当に幸せそうに眠っている。

「もしかしたら、イリスは知っているのかな？」

もしかしたら、イリスはどうして自分たちがここにいるのか知っているかもしれない。もしそうなら、起こして訊いた方がいいのだろうか。

でも、こんな幸せそうに眠っているのを起こすなんて、できそうにない。

「どうしよう……」

考えてはみるものの、なかなかいい案が浮かんでこない。

「どうしようかな……」

目をつむって考えていると、いつの間にか眠ってしまっていた。

「ん、んん」

気持ちよく眠っていたイリスは、もぞもぞと体を動かす。

「ん、むにゃあ……」

もぞもぞと動いた時に、ざらりとした感触がして、目を覚ました。

「ん、んあああつ」

可愛い口を大きく開けて、あくびをする。きっと、誰かがそれを見ていたら、誰もが可愛いな……と思っただろう。そんなあくびだった。

イリスはひょこっと体を起こして座り、大きく伸びをした。

「ん、んんん……。よく眠ったな……」

イリスは、その大きな瞳をぱちぱちとさせる。

「ん、んん、まだ眠いです……」

こしこしと、目を擦る動作は、どこか小動物のようだった。

「……なんだか、寒いです」

イリスは、服の襟を寄せる。

「もう少し眠りましょうか」

まだ少し眠くて、もう一度横になって眠ろうとしたところで、ここが自分の部屋のベッドでない事に気付いた。

イリスは、あら？ と首を傾げる。

どうやら、自分は地面に直接眠っているらしい……というのは、下が土だったのでそう思った

。

「……あら？ ここは……どこでしょう？」

まだ眠いぼんやりとした頭で考えるが、どうして自分が地面に眠っているのかわからない。

「もしかして、森の中で眠くなって、そのまま眠っちゃったのかな……？」

そう考えて、ありそうだな……と口元に手を当てて、笑みを浮かべる。

花畑を散歩していて、そのまま気持ちよくなって、眠ってしまった事を思い出して、くすくすと笑う。

「やっぱり、私はまだまだ子どもですね」

大人からすれば、どう見ても小さな子どもだ。事実、まだ六歳にようやくなろうという頃なのだから、子どもに違いはない。

早く大人になろうと思った事は、一度や二度ではない。いくらか、大人ぶろうと背伸びをした事も、数えられないくらいある。

しかし、こういう時は、やっぱり年相応の子どもでしかないと思い知らされる。

「ふあああああつ」

まだまだ眠く、大きなあくびをする。

「ここでもいいかな……」

草原や花の上の方が気持ちいいな……と思いながらも、眠気には勝てないようで、大きなあく

びをして横になる。

「……あれ？」

横になって、初めて自分以外に誰かがいる事に気付いた。

「ナ・ムーウェン？」

自分が眠ろうとした横に、見慣れた顔があって驚いた。

どうしてここにいるんだろう？ と思ったが、いつも一緒にいるので、不思議じゃないな...
...と、あまり気にしない事にした。

隣にいるナ・ムーウェンは、気持ちよさそうに眠っているので、自分も眠っても問題ないだろう。

なにより眠たい。

やっぱり、草原やお花畑の方が気持ちいいな.....と思いながら、イリスはゆっくりと瞳を閉じる。

すぐに、すうすうと気持ちよさそうな寝息が聞こえる。

ガサガサツとなにかの音がして、ナ・ムーウエンは飛び跳ねるようにして起きた。

「あ、えっ？ えっ？」

なにが起きたのかと、周囲を見回す。

しかし、特に変わった様子はない。

周りには土の壁があるだけで、他にはなにもない。ただ、イリスが眠っている以外は。

「……………ふう」

おそらく、近くを獣かなにかが通ったのだろう。もしかしたら、人だったのかもしれない。

ともかく、無事だった事を確認して、ホッと胸をなで下ろす。

「……………って、もし誰かが通ったなら、助けてもらえたかもしれない……」

安心したせいか、冷静に考えると助けを求めればよかったと後悔する。

「でも、もし違ったら襲われるかも……」

やっぱり、人間でなかったら危険だと思い直す。

「でも、やっぱり夢じゃないんだ……」

もしかしたら、今度目が覚めた時は、いつものベッドかもしれないと、少しだけ思っていたので、がっくりと肩を落とす。

「それにしても、やっぱり思い出せないや」

よく眠って、頭がすっきりすれば、どうして自分がここにいるかわかるかと思ったが、やっぱり思い出せなかった。

「どのくらい、眠っていたのかな……」

上の方に見える空を見るが、まだまだ明るいので、夜ではないらしい。

もし夜なら、自分たちが帰らなくて、心配して、みんなが探しているだろう。

「早く帰らないと」

帰りが遅くなってしまうと、みんなに心配を掛けてしまう。その前に帰らないと。

「やっぱり、イリスを起こさないでだめかな」

ナ・ムーウエンは、隣で眠っているイリスを見る。

あれからずっと眠っているのだろうか。今も、すうすうと可愛い寝息が聞こえる。

幸せそうに眠っている姿を見ていると、起こす事ができそうにない。

「う、ううん、だめだ。ここは起こさないと」

ここままだと、どうしようもないし、もしかしたら、イリスと協力すれば、ここから出る事ができるかもしれない。

「よし、起こそう」

ナ・ムーウエンは、小さな拳を握って、眠っているイリスを見る。

「うっ……」

こうしてじっと見ると、やっぱり起こすのは可哀想に思える。

「で、でも……がんばらないと」

ナ・ムーウエンは、見ているとできそうになかったので、目をつむってイリスの体を揺する。

「イリス……起きてよ、イリス」

「ん、ん、む、にゃ、むにゃ……」

ナ・ムーウエンが体を揺ると、イリスはもぞもぞと逃げるように動く。

「ん、んあ、もうちょっと……」

「ご、ごめん」

イリスの寝言に、ナ・ムーウエンは思わず手を止める。

「んあ、ありがとう……」

イリスは、ころりと体勢を変えて眠り続ける。

「あう……。起こさないといけないのに……」

ナ・ムーウエンは、もう一度イリスを起こそうと挑戦する。

「イリス、イリスってば」

もう一度イリスの体を揺する。

イリスは、むにゃむにゃと言いながら、ころりと逃げる。

「もう、イリスってば、いい加減起きてよ」

今度は諦めずに、なんとかイリスを起こそうとする。

「ねえ、起きてよ。イリスってば」

それでも、イリスはころころと転がって逃げる。

本当に眠っているのかわからなくなってくる。もしかしたら、本当は起きていて、自分をからかっているのかもしれない、と思ってしまう。

それでも、何度も何度もイリスの体を揺する。

ころころと転がって逃げていたイリスだったが、ぼすっと壁に当たって止まる。元々、それほど広くないので、向きを変える事も難しい。

「もう、逃げられないよ」

これ以上、転がって逃げる事はできないだろう。ここぞとばかりに、ナ・ムーウエンはイリスを起こそうとする。

「イリス、イリスってば……。いい加減、起きてよ」

ゆさゆさとイリスの体を揺する。

「ん、むにゃむにゃ……」

寝ぼけたままのイリスは、ナ・ムーウエンの手を払う。

「イリスってば……」

次第に、ナ・ムーウエンの声に涙が混じってくる。

「もう、イリス……お願いだよ。起きてよ、イリス」

ここまでして起きないなら、もう諦めた方がいいのだろうか、と思った時、イリスは顔をしかめて、ゆっくりと目を開けた。

「イリス」

ようやく起こせた事で、大きな声を出すナ・ムーウエン。

「もう、なんですか……」

こしこしと、目を擦りながらイリスが体を起こす。

「どうしたんですか、そんな大きな声を出して」

イリスは口許を手で隠しながら、はわわと可愛いあくびをする。

「イリスを起こそうとしてたんだよ。よかったよ……。やっと起きてくれた」

そう言ったナ・ムーウエンの目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「どうかしたのですか？」

イリスは不思議そうに首を傾げる。

「どうしたのって……。そうそう、ここ見てよ」

「ここ？」

どこだかわからず、イリスは首を傾げる。

「どこですか？」

「……イリスってば、まだ寝ぼけてるの？ ここだよ、ここ。ボクたちがいるところ」

そう言われてイリスは、ああと頷いた。

「そういえば、さきほど、少し目を覚ました時に、穴みたいな所だな……と思った気がします」

「イリス……一度起きてたんだ」

なんだかそれを聞いて、ナ・ムーウエンは脱力する。

「でも、それなのに、また眠っちゃったの？」

「ごめんなさい。少し眠かったので、つい。それに、もしかしたら、これが夢かもと思ったもの
ですから」

「そう……なんだ」

イリスの話を聞いて、そういえば自分もだな……と思い、それ以上なにも言えなかった。

「ねえ、イリスはなにか覚えてる？」

なんだか、恥ずかしくなったナ・ムーウエンは、慌てて話題を変える。

「なにか、ですか？」

「そう。どうして、こんな所にいるのか、覚えてない？」

「あなたは、覚えていないのですか？」

そう訊き返されて、ナ・ムーウエンは言葉を失う。

「ごめん。ボクはなんとか思い出そうとしたんだけど、思い出せなかったんだ。だから、もしか
したら、イリスは覚えてるかもって……」

「そうでしたか。そうですね……」

イリスは、口許に指を当てて上目遣いで考える。

「ここは、ベロスからそれほど離れてないと思うんですけどね……」

「そうだよね。ボクたちだけで、ベロスからそんなに遠い場所に行けるはずないし」

将来は、ジエンディア大陸のあちこちを冒険したいと思っているが、まだまだ子どもの自分た
ちでは、隣の街へ勝手に行くだけで、大騒ぎになってしまう。

第一、それほど遠くまで行った記憶はない。

だから、ここはベロスの近くのはずだ。

「近くになにか見えればいいのですが……」

「そうだよね。でも、ここからじゃ、空しか見えないんだよね」

二人は同時に上を見る。

そこからは、相変わらずの青空しか見えない。

風が吹くと、さわさわと木の葉の音がするので、どこか森の中なのかもしれない。

「さっきも、登ろうとしたんだけど、無理だったんだ」

「そうだったんですか」

イリスは、なんとか登れないかと考えていたが、ナ・ムーウエンの眩きで、考えを変える事にした。

「ねえ、私を担いでもらえませんか？」

「……へっ？」

一瞬、イリスがなにを言っているのかわからなかった。

「ですから、私を担いで、持ち上げてもらえないでしょうか」

「なるほど……二人で協力すれば……」

一人では無理でも、二人で協力すれば、上まで届くかもしれない。

「わかった。やってみよう」

「では、お願いします」

早速、ナ・ムーウエンは、イリスを持ち上げようとしたのだが……。

「ん、んんんっ」

イリスの腋に手を入れて、持ち上げようとするナ・ムーウエンだったが、なかなか持ち上がらない。

「大丈夫ですか？」

イリスが心配して訊くものの、ナ・ムーウエンは、んんんっ顔顔を赤くして力むのに精一杯で、それに答えられない。

「ごめんなさい、私が重いから……」

「……ぷはあっ」

ナ・ムーウエンは、ついに力尽きてしまう。

「大丈夫ですか？」

イリスは、はあはあと息をしているナ・ムーウエンに声を掛ける。

「だ、大丈夫だよ。ごめん。ボクにもっと力があればいいんだけど」

はあはあと肩で息をしながら答える。

「ごめんね、イリス。ボク、もっと鍛えるよ」

ナ・ムーウエンは、冒険に出るためには、もっともっと鍛えようと思った。

「どうしましょう……」

イリスは見上げて呟く。

「そうだ。ボクの上に乗ってみてよ」

抱えて持ち上げる事はできなかったが、自分が土台になるくらいはできるはずだ。

「でも……」

イリスは他の人の上に乗るという事で、ためらってしまう。

「大丈夫。絶対にイリスを落としたりしないから」

「でも、上に乗るのは……」

「ここから出るには、そうした方がいいと思うんだ」

ナ・ムーウエンは、まっすぐにイリスを見る。

「……わかりました」

そんな目で見られて、イリスは心を決めた。

「じゃあ、乗って」

ナ・ムーウエンは地面に手を突き、四つん這いになる。

「では、失礼します」

イリスはそのままナ・ムーウエンの背中に乗る。

乗った瞬間、ナ・ムーウエンが、うっと声を洩らす。

「ごめんなさい。やっぱり……」

「大丈夫。イリス、上に届く？」

遠慮して降りようとするイリスを止める。しかし、そう言う声は、ようやく出しているという感じで、イリスは苦しめたくない而降りようとする。

「イリス、大丈夫から。どうかな？ 届くかな？」

今度こそ失敗しないようにしようと、ナ・ムーウエンはありったけの力でイリスを支える。

「ん、もう少し……」

イリスは手を伸ばすが、外まであと少しが届かない。

「もう少し……もう少し」

イリスはなんとかしようと、つま先立ちになる。

「んっ」

急に力が掛かって、ナ・ムーウエンは支えきれずに崩れてしまう。

「きゃっ」

イリスは、ナ・ムーウエンの上に座るように倒れる。

「いたたたっ……」

下敷きになったナ・ムーウエンだったが、特に怪我もなかった。

「ごめんなさい。もう少しだったんですけど……」

「謝るのはボクの方だよ。最後まで支えてあげられなかった。大丈夫だって言ってくせに、ボクにはなにもできなかった」

約束を守れなかった事を悔やむ。

「私こそ、ごめんなさい」

イリスはナ・ムーウエンの上から腰を上げ、今まで自分が座っていた場所を優しくさする。

「本当にごめんなさい」

イリスは、今にもぽろぽろと涙をこぼしそうになっていた。

「大丈夫だよ。ボクがだめだっただけなんだ」

「ううん、そんな事ありません」

イリスはぶんぶんと首を振る。

「……うん、ありがとう」

ナ・ムーウエンは体を起こして、壁に背を預けるように座る。

それを見て、イリスも同じように、横に並んで座る。

「そういえば、さきほどの事で思い出した事があるのですが……」

イリスが口を開く。

「ん？ なに？」

ナ・ムーウエンが訊き返した時、

くう～。

と、可愛い音が鳴った。

なんだろうと思い、ナ・ムーウエンが横を見ると、イリスが顔を真っ赤にしていた。

「……………あう」

「イリス……？」

「ごめんなさい。ちょっと、お腹が……。ほう、恥ずかしいです」

顔を真っ赤にしているイリスを見て、ナ・ムーウエンは、ぶんぶんと首を振る。

「そ、そんな事ないよ。ボクだって……」

と、お腹を押さえる。事実、お腹は鳴らないまでも、空腹には違いなかった。

そういえば、どのくらい穴の中にいるんだろう？

「あ、あのね……」

お腹の音を聞かれて、耳まで真っ赤に染めたまま、イリスが口を開く。

「あのね、思い出した事があるのですが、ベロスの近くで、どなたかになにかを教えてもらいませんでしたか？」

そう言われて、ナ・ムーウエンは腕を組んで考え込んですぐ、あっと声を上げた。

「そうだよ。ボクたち、誰かにこっちになにかあるって聞いて……それで、森に……。えっと…
…なんだっけ？」

「そうですね……ゆっくりと思い出してみましよう」

「今日もいい天気だね、イリス」

「そうですね。空気もおいしいですし、風も気持ちいいです。あ、あそこに可愛い鳥がいますよ」

そう言って、イリスはとことこと走っていく。

「ちょっと待ってよ」

ナ・ムーウェンは慌ててそれを追いかける。

「鳥さん、待ってください」

イリスは夢中で鳥を追いかけていると、

「あっ」

「おっと」

イリスは誰かにぶつかって、とすんと尻餅をついた。

「いたたたた……」

転んだイリスは、お尻をさすりながら見上げると、

「おいおい、お嬢さん。おてんばなのもいいが、前を向いて走らないと危ないぞ」

そこには、イリスたちよりは少し年上の少年が立っていた。

年の頃は少し上のようなのだが、まとっている雰囲気は、実際の年齢よりも上に思わせる。

そのせいもあり、ぶつかってしまったイリスは、どうしようと慌てふためく。

後を追っていたナ・ムーウェンも、それを見て、街の大人に知らせた方がいいのかな、とあたふたしていた。

「怪我はなかったかい？」

その少年が、すっと手を差し出す。

「……………」

イリスはしばらくどうしたらいいものかと迷っていると、

「ずっとそこに座ってるつもりかい？」

少年はにこりと笑う。

「あ、あの……ありがとうございます」

イリスは少年の手に掴まり立ち上がる。

「イリス、大丈夫だった？」

それを見ていたナ・ムーウェンが、慌てて近寄る。

「友達も一緒か。なら、大丈夫だな」

そう言って、少年は手に持っていた赤い果物を、シャクリと音を立ててかじる。

「じゃあな」

そう言って立ち去ろうとしたが、待ってください、とイリスが呼び止める。

「どうかしたか？」

不思議そうな顔で少年がイリスを見る。

「あの……それ……」

イリスの視線は、少年が手に持っている果物に注がれている。

「これか？」

少年は、それをひょいと持ち上げる。

「はい。とてもおいしそうだなと思ひまして……」

それを聞いた少年は、はははと笑う。

「そうか……。だが、今はこれしかないんだ。そうだな……。そんなに欲しけりゃ、自分で採ってきたらどうだ？ あそこの森にあるぜ」

そう言って、少年はペロスの近くの森を指す。

「そうですか。ありがとうございます」

教えてもらったお礼をきちんと行って、ぺこりと頭を下げる。

「お〜い、カズノ。なにしてんだよ。置いてくぞ」

遠くから、少年を呼ぶ声がする。

「悪い、すぐ行く」

カズノと呼ばれた少年は、じゃあな、と言い残して仲間の所へ走っていく。

「ねえ、あそこにあるんだって、行こうよ」

ナ・ムーウェンに向かって言うと、返事を待たずに走っていく。

「ちょっと、イリスってば……」

「そういえば、そうだったね」

今日の出来事を思い出して、ナ・ムーウエンが呟いた。

「森へやってきて、あの果物を探していると、確か私が……」

「そうだよ。イリスが急にいなくなって、探してたら……」

「一緒に落ちたんだ」

うん、とナ・ムーウエンが頷く。

「誰にも言わないで来たから、みんな心配してるだろうな」

「ごめんなさい」

イリスはしゅんしてと謝る。

「ううん、別にイリスが悪いって言ってるわけじゃ……」

そう言うものの、イリスはますます落ち込んでしまう。

「そういえば、お腹空いたね……。あの果物、食べたかったな……」

ナ・ムーウエンが、強引に話題を変える。

「……食べたいですね」

せっかくの話題だが、場が明るくなる事はなかった。

「お腹空いたな……」

ナ・ムーウエンは、お腹を押さえながら、恨めしそうに上を見る。

「空きましたね」

イリスも同じように上を見る。

そうして、しばらくぼんやりと見ていると、いつの間にやら眠ってしまっていた。

シャクシャクとリンゴを食べながら、カズノは森を歩いていた。

たまたま通った森で見つけたものだったが、かなり自分好みだったので、仲間に待ってもらって、再び採りに来ていた。

「ここのは、格別だな。……そういや、さっき、ガキどもが採りに行ったみたいだが、採れたのか？」

ふと気になってみるものの、どうせ会うわけではないと歩いていると、目の前にぽっかりと穴があるのを見つけた。

「こりゃ、結構でかいな。まあ、さすがに落ちる事はないだろうよ」

そう言って、穴の横を歩いている時、気まぐれで覗いてみる。

「……マジかよ」

そこには、あの二人がいた。

「まったく……。このまま、出れないってか。それにしても、ぐっすり眠ってやがるな」

すうすうと眠っている様子が、上から見てもわかる。そののんきさに、思わず笑みを浮かべる。

周囲を見ても、街の人間が来る様子はない。

「しょうがない」

このまま放っておくわけにもいかない。

カズノは、適当な草の蔓を見つけ、それを近くの気に結ぶと、それを掴んで穴の中に入った。上からだと深そうに見えたが、どうやらそれほどでもなさそうだ。しかし、子どもには充分すぎるくらい深い。

カズノは、女の子から先に抱き抱えると、蔓を掴んでよじ登る。

もう一度、男の子を抱えて繰り返す。

そして、二人を近くの樹にもたれ掛けるようにして座らせる。

そうしても、起きる様子はない。

「まったく……運がいいんだか悪いんだか」

カズノが通りかからなければ、ずっと穴の中にいたかもしれない。しかし、この場所を教えたのもカズノだ。

「まあ、さすがにもう落ちないだろう」

苦笑いを浮かべながら、カズノはその場を立ち去った。

「ん……………んむ？」

しばらくして、ナ・ムーウェンが目を覚ました。

それと同時に、イリスも目を覚ます。

「あれ？　ここは？」

「外……ですね」

二人はきょろきょろと見回す。

「あれって、夢だったのかな？」

「どうでしょう？」

夢だったのかよくわからない。しかし、夢なら同じ夢だという事になる。

「あっ、あそこ」

突然のイリスの声に驚きながらも、イリスが指す方を見ると、そこには赤い果物がなる樹があった。

二人は、一目散に樹を目指して走る。

「やっと食べられるよ」

するするとナ・ムーウェンは樹に登って、果物を二つ採って降りてくると、一つをイリスに渡す。

「ありがとうございます」

イリスはそれを受け取ると、笑顔でかじりつく。

「おいしいです……」

「本当だ。おいしい」

こうして、ようやく食べる事ができた頃には、空は茜色に染まっていた。

F i n o .

切り取られた空を見上げて

<http://p.booklog.jp/book/26011>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26011>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26011>